

「云鬼の破船と救い」(使徒 27: 27-44)

「パウロは百人隊長や兵士たちに『あの人たちが船にとどまっていなければあなたがたは助かりません』と言った。... こうして彼はパンを取り一同の前で神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。それで皆も元気づけられ食事をした。... ところが船を座礁させてしまった。... 兵士たちは、囚人たちがだれも泳いで逃げないように殺してしまおうと図った。しかし百人隊長はパウロを助けたいと思い、彼らを制止して、泳げる者たちが海に飛び込んで陸に上り... こうして全員が無事に陸に上った。」

先回はとんぼ難局にも目下まいパウロの信仰について学びました。それは父祖アブラハムの信仰のように神の約束。それは、「パウロが必ずローマでカイセルの前で証しするようになること。そして乗船している全員の命はパウロに賜っている」というものでした。今日学ぶところは、パウロがその確信に基づき、いかに的確に具体的に行動したか、ルカにおいてそのプロセスが正確に記されている。ホロススの「エリニス」では、英雄は10年間に漂流した後に無事帰還するのだが、信仰の英雄パウロの場合14日間にアリア海を漂流し、結果的にはローマに近いマルタ島に漂着したのである。そしてパウロとルカとアリストル。そして乗船者276人全員が一人残らず救われ、助かって上陸できたのであった。この生還物語は、正に奇跡的と言えよう。この箇所には、神も、使徒の働き自体がルカにおいて書かれたからである。少しだけでもタイミングがずれていたら破船においてパウロもルカもその犠牲者となっていて「使徒の働き」のメモ記録が消滅してしまっただろうからである。最近起った「知床」での親先船沈没事故のことと思えばよく分る事柄である。まさに今日の箇所を読むと、英語の成句 by the skin of one's teeth [J19:20] “う破一皮の差で”助かった。これがよく分るのである。彼らが助かるまで、いくつかの切所(危機)があった。先ず、事の発端は、神のこぼれを持つ預言者であるパウロの勧めを無視した事から始まった。1) パウロは「良い港」に留まることを主張した。しかし、世の常識や、常識の外の「左二ツ」(不死鳥)にまどわされたか、危険な海に出てしまった。2) パウロが、水夫たちが小舟を下し、脱出しようとするのを見つ、百人隊長に報告した。水夫たちを止めることができなかったが、上陸のとき必要の小舟は、パニクした兵士によって流されてしまったのは否(なかった)。3) パニクから絶食状態になっていた乗員たちに、食事を取ることを、パウロ自らパンを取り、それを裂き、神に感謝して食べ、その実践により、パニクから日常の平常心に戻す効果があり、皆も食べることで体力増進をはかった。また、たけなげの行動だが、動物である人間の根本的原理に立ち帰っている。正に「腹へはって戦いは出来ぬ」のである。これは極度に消耗した体力を回復させ、危機を乗り切るエネルギーを与え、思い残すことなく、残りの貯蔵食糧を捨て、船足を軽くする効果にもつなげた。4) 二つの潮流がぶつかる地点で、27日に船が座礁したとき、囚人の世を恐れた兵士たちに殺さぬかたが、百人隊長の働きにより助けられた。これは平素のパウロの態度や生き様が隊長の好意を引き寄せた為であった。ルカがなぜここまで詳細に破船のようすを記録したのか、オ1には、歴史的事実を余すところなく記録しようとする歴史家ルカの特質からであろうか、オ2には、霊的な意味があるように思われる。パウロは自分の二度も破船した経験を踏まえ、信仰から脱落して行く人々の事を破船にたとえている。「ある人は健全な良心を捨てて信仰の破船に会いました。」(1テモテ1:19) その少し前に「あなたがあの預言によって信仰と健全な良心を保ち立派に戦い抜くためです」とパウロはテモテに忠告しています。この「健全な良心」ということは、この破船劇のパウロの

言動の中に見ていくと、その意味が分て来るように思えます。パウロは「あの預言によって」と言うのは、「神のみことば」即ち聖書によって、「神の知恵によって」とも言い代えることができます。パウロの場合「あなたはカザルの前に必ず立つ。そして乗り合わせた全員が助けられる」が神の預言であった。パウロはその神のことばを信しました。しかし彼は信じて何もせず、ホーとしてたたり行きにまかせるという態度ではなく、彼は健全な良心を保ち立派に戦い抜いた事だ。言いかえれば、彼に与えられた学問で得た知識や知恵、そして経験に根ざした知見や勘のようない種々のひらめきなども総動員して、この世の原理にも則って行動している事であると思う。パウロは、「船は船頭や水夫による」とするプロフェシナルな大それたことでも心得ていた。なぜなら彼自身も「 TENT 作り」のプロであったからだ。軍隊の組織についてもよく知っていたようにある。TENT 作りの関係性があつたと考えられる。「命令や指揮系統が確立していなければ良い戦いは出来ない」と分ていた。パウロはこの破船に関して、自らの体験から十分な経験知を持っていたが、それを正しく運用するには、その道筋にかつたものでなければダメなのをよく承知していた。自分の勧めを百人隊長は採用しなかった事も決して反感を抱かず、百人隊長に従った。その態度に百人隊長も彼に好意を持ちパウロを信頼した。破船のとこ、兵士の衝動的な行動を制止した。かえってパウロの助言にす直に心している。パルもパウロと一緒に食べ、パウロの助言に従い逃げようとした水夫たちを確保している。この協力関係がうまくいかければ、この破船の危機を乗り切れなかつたに違いない。考えて見ると破船の最大の原因は、サイクロンと云う地中海特有の気象現象と複雑な海底状況、石洲や岩礁などの物理的、自然的要因によって起っている。そしてそれを上手に回避するのは秩序立った人間の行動原理に依っている。それを可能にしているのが、パウロの「健全な良心」なのである。

これを別の言い方で言えば、エモーション「良識」と言ってもいいだろう。人々をパニックから救うのに、まず「正しい食事」をさせ、「パルを裂き、神に祈って」という霊的行動をさりげなく加える事で、よりよく彼らの精神を安定させ、しっかり食事する事で、エネルギー補給することにより最後の難所、浅瀬を泳いでいる者は自力で、ある者は板子にのりついて泳いで渡るエネルギーの源となつたと言えるでしょう。この事について私にも経験があります。以前にもお話しした事がある気がしますが、また四十年の頃、五月の残雪が多かつた時季、尾瀬ハイクに独りで行きました。雪の予備山に登り、山頂から尾瀬原に向う途中遭難（かけた事がありました。合羽をそれ代りに使って下山してしまつたが、道から知らないうちに、雪の斜面を谷に下つてしまったので、気が付くと森の中に入つてしまふ。森の中をぬけて尾瀬原に行こうと歩き出さず、かくれた沢の「ウウウ」という音に恐くなり身の危険を感じ引き返しました。下りて来た急斜面を登ろうと見上げるとその巖壁にたどり着きました。その時まず落ちるに食事をして祈りつつ休みました。そしてゆっくり雪の斜面を一步一步登って登山道に出て帰ることが出来たのです。パウロは実際の破船事故を通じて、云々の破船から逃れる模範を示してくれている。聖と俗とを峻別してはならない。俗の中に実は聖があるからである。俗である百人隊長や水夫に先じて聖なるパウロが働いたのでなく、俗なる彼らの中に隠れて聖なるパウロが働いた事で、この難局を抜け出すことが出来たのであつた。パウロの行動こそ「先ず神の国とその義を求めたことであり、これらのことすべて（破船から全員が脱出できたこと）は、それに加えて与えられた事であつた。そして、それこそ「神を愛する人たちは、必ず神の御計画にたがって召された人たちのためには、すべてのことがともかく働いて益となることを私たちが知っているからである。」（ローマ 8:28）